

つながり

トクちゃん

(仮称)

村民と村外村民の

共助 & 協働ネットワークによる

生活支援の仕組み開発プロジェクト

(中間報告)

1000 年つづく里をめざして

自然に恵まれた集落は心豊かに暮らすことができます。

いっぽう、都会から離れているがゆえに、
介護・医療・生活支援等について十分な外的サービス
(設備や人材が整った施設や団体) は期待できません。
また、これらの外的サービスを受けるためには相当の出費が伴います。

しかし、
もし「食べる・住む」のように集落ならではの長を生かして
これらのサービスを地産地消できれば、
外的サービスへの期待値や出費を下げることができます。

そこで、都会には無い「人と人のほどよい関係性」を生かして、
介護・医療・生活支援等のサービスの一部を
「つながり」の力で楽しく実現していく仕組みを開発しよう、
という事業がスタートしました。

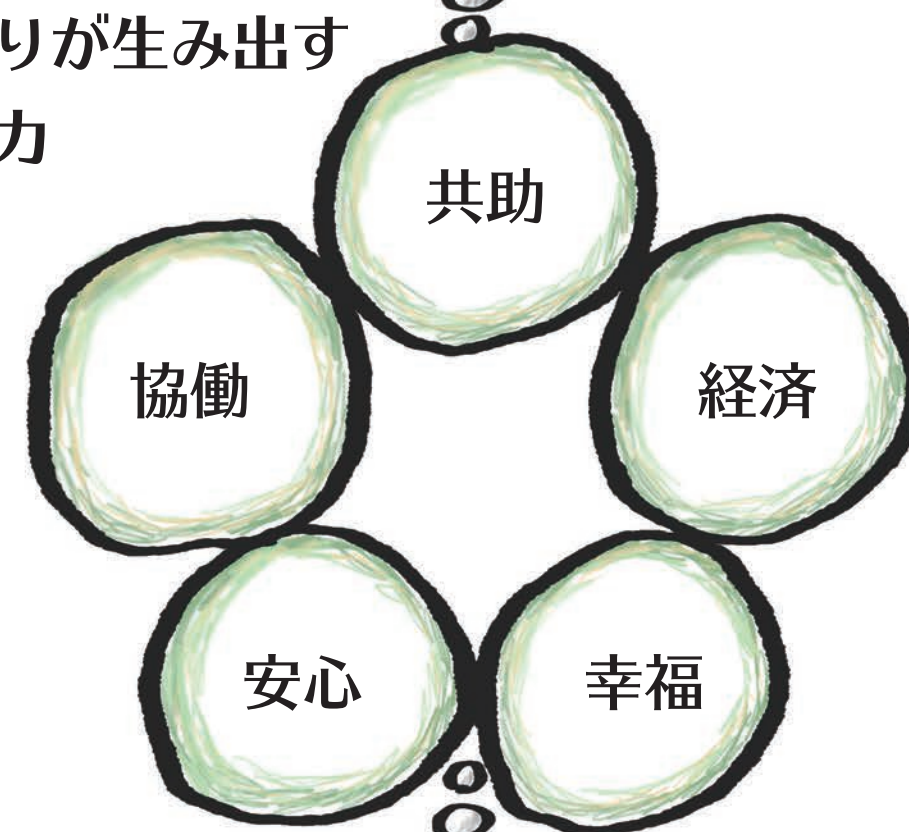
このパンフレットはこれまでの成果をまとめたもので、
より多くの方と活動を共有し
ご意見・ご感想をいただくことを目的に制作しました。

また、興味・関心のある方は今後の活動にぜひご参加ください。

プロジェクトの目的

共助・協働を活発にする場をつくることで、
見守り、生活支援、介護、防災等の課題を軽減する。

つながりが生み出す 5 つの力



依存しあえる共同体の 3 つの安心レベル

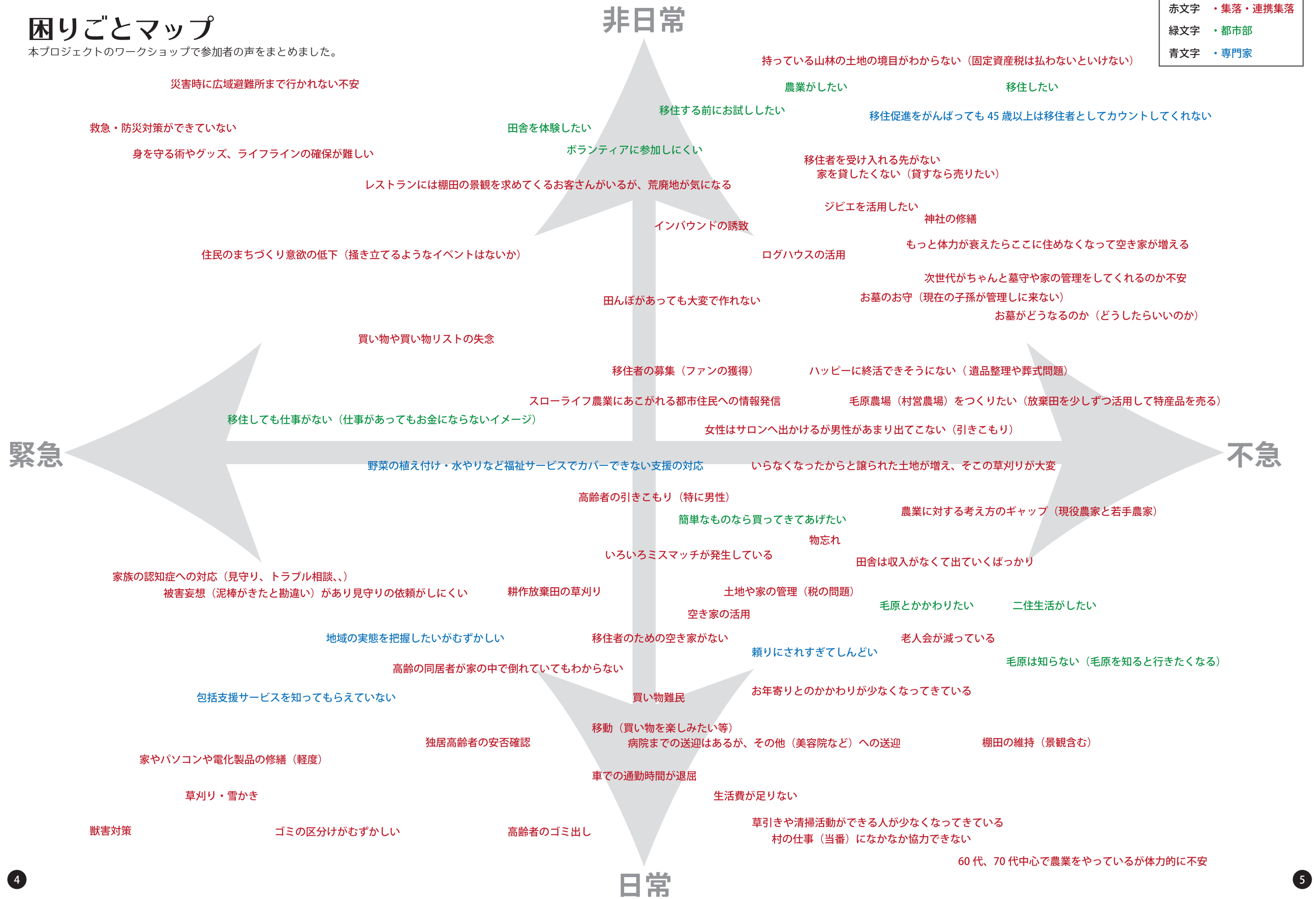
- ① 輪の中にいる
- ② 《困りごと・できること》を共有する
- ③ おせっかいで暮らしを彩る

ひとつずつ安心できる生活支援コミュニティプラットフォームを育てていく。

困りごとマップ

本プロジェクトのワークショップで参加者の声をまとめました。

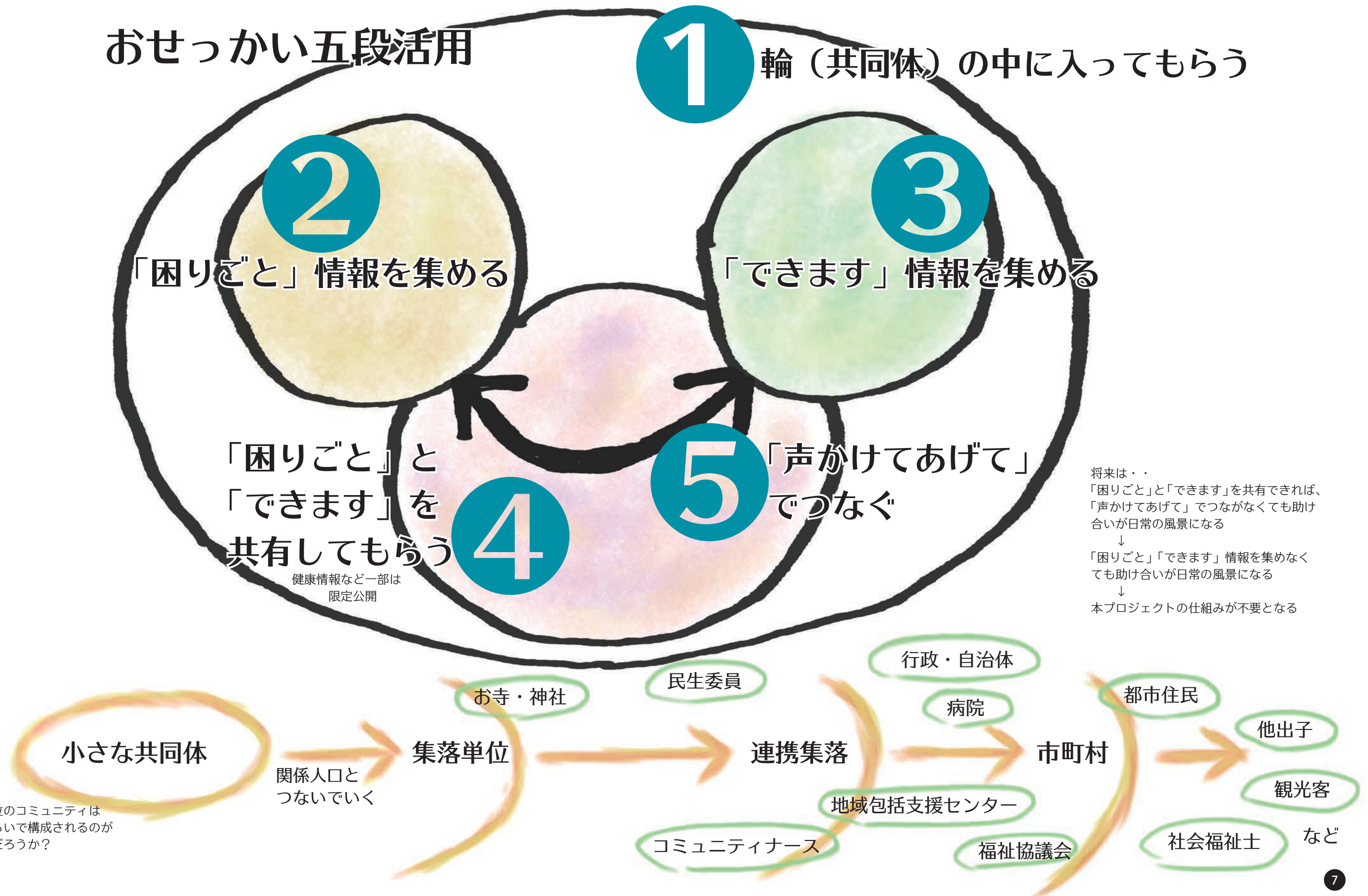
赤文字	・集落・連携集落
緑文字	・都市部
青文字	・専門家



「トクちゃん」の仕組みについて

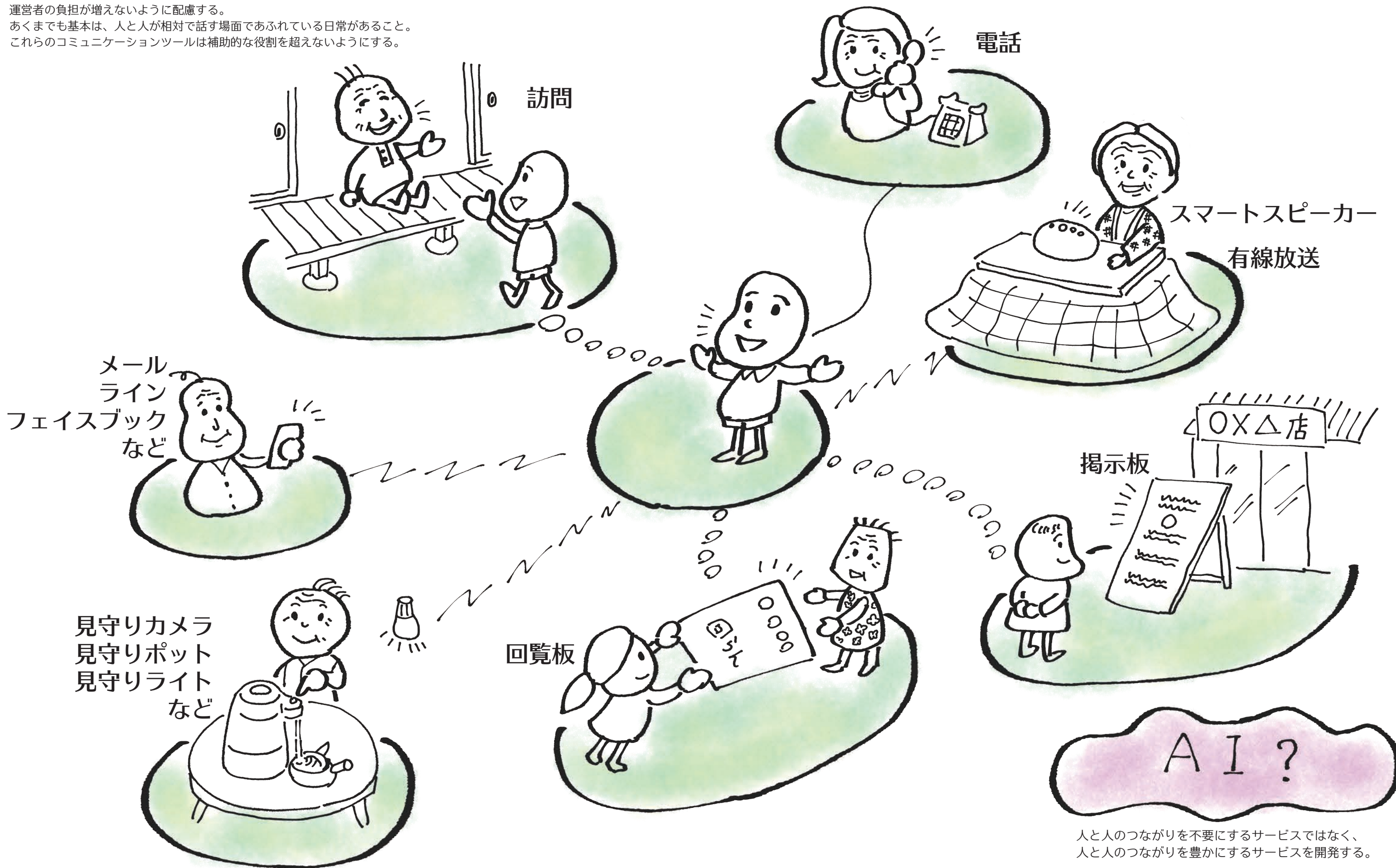
住民のだれもが「助け合いやすい」関係になるまでの一時的な「おせっかい」づくり。

おせっかい五段活用



コミュニケーションツールについて

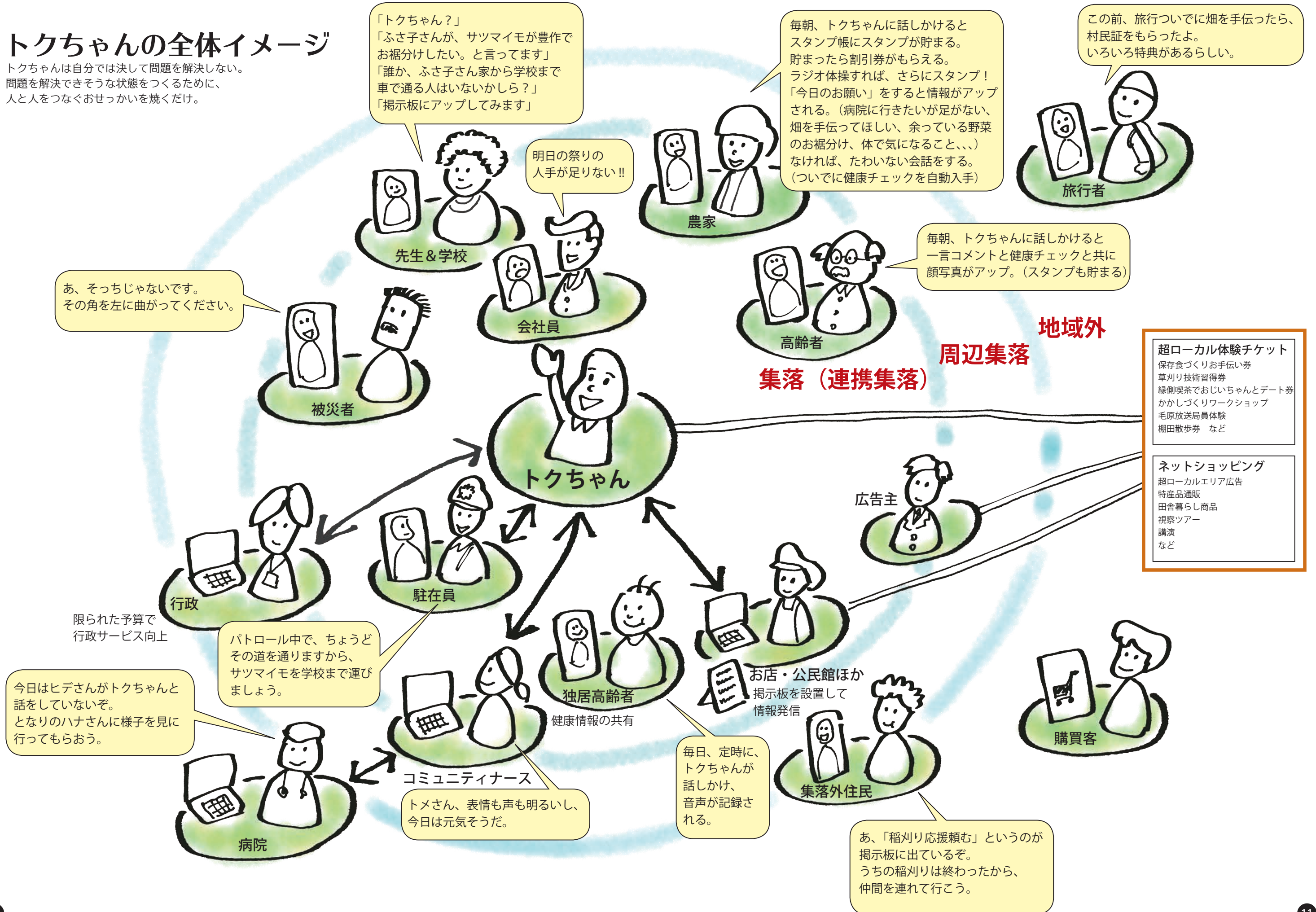
利用者の事情に合わせてツールを組み合わせる。
 運営者の負担が増えないように配慮する。
 あくまでも基本は、人と人が相対で話す場面であふれている日常があること。
 これらのコミュニケーションツールは補助的な役割を超えないようにする。



人と人のつながりを不要にするサービスではなく、
 人と人のつながりを豊かにするサービスを開発する。

トクちゃんの全体イメージ

トクちゃんは自分では決して問題を解決しない。
問題を解決できそうな状態をつくるために、
人と人をつなぐおせっかいを焼くだけ。



本プロジェクトのワークショップでのご意見

活発な意見が飛び交いましたなかの一部を紹介。

ぼちぼちでよい。

60代、70代の男性が
どうしようかと悩んでいる。
交流の力ギは祭り。

大江は1万人のユートピアを目指していたが、4,000人を切り、
夜久野も3,300人を切った。高齢者は50%を超え、
最近は競うように高齢化比率を高めている。

まちづくりしていても
高齢者が増えていて不安。

昔は認知症のことを老人力といっていた。

いろんな地域の人、いろんな年代、いろんな職業の人が
参加していることがとても大事。

女性の参画がとても大事。
家族や知り合い、親戚、子どもを巻き込みたい。

共助への期待と現実の不安が入り混じっている。

子ども会もあるが子そもは2人しかおらず、
やる意味がない。

20代ができることを考える。

困りごとの声を上げてほしい。

過疎地だとケアマネがない。

若い人たちが問題意識を持ってきている
ことがうれしい。

包括支援センターに連絡してもらえれば
職員を派遣することも可能です。

大学とのつながりを活用。

スマートスピーカーを使って
トクちゃんを活用。

年金の中から介護保険料を払っているのに
サービスがいきわたらない。

地域で空き家を管理する。

亡くなった本人の意思と
遺族のコミュニケーションが
とれていないことが多い。

一日一回必ず挨拶することをルールとする。

困りごとを共有するとともに、
無理なくできる時間と内容を事前に
登録・共有する仕組みを検討。

現実問題の壁をどう解消させていくか。
何年後に仕組みが完成するのか...

旅で何週間か滞在していると、
何か地域の仕事をするのも自然。

どっちが先に逝ってもたいそうなお葬式は
しない、などの意思と協力体制を共有。

関係人口をどう増やしていくか。
行政も考えている。

ミスマッチを防ぐために、
事前の情報共有・提供が大切。

困っていることばかり共有するのではなく、
イベント情報なども共有。

体験ができる観光メニューを用意してあげる。

農家民泊や農作業イベントのついでに
草刈りを組み込む。

農作業の手伝いとかを
ツーリズムを活用してやってもらう。

お墓を集落のお寺に集約させる。
(地域で永代供養)

獣害対策として、人が山に入る
ウォーキングイベントや狩猟イベントを開催。

事務局を運営する際、
中心人物にかなりの負担がかかる。

ゴルフカートくらいの大きさの車で
集落内を自動運転。

公会堂に配達物が届き、ドローンで集配する。

できることから少しずつ歩み続けていく

無理をせず、あきらめず、日々のまちづくりを楽しむ。

以前より企画・準備している
「毛原放送局」を
コミュニケーションツールの核にしてみる。



毛原放送局

ユーチューブ

スマート
スピーカー
有線放送

目的

- 1000 年つづく里づくりを実現する
- 毛原村民と村外村民との
共助&協働コミュニティを育てる

使命

- 毛原の魅力を伝えて毛原ファンを創出
- 共助&協働コミュニティ内の困りごとを共有
- 共助&協働コミュニティ内のできるコト・時間を共有
- 困りごとを体験コンテンツ化して販売
(運営を持続可能にするために)

毛原新聞

フェイスブック
など

いくつかのコミュニケーションツールを一体化させる。
利用者がどれを使っても、すべての情報にアクセスできるようにする。

仕組みはできるだけシンプルなものをめざす。

観光はこのサイト、防災はこのアプリ、緊急事態はこのボタン、、、
というような、課題ごとに対処療法的に解決策を講じるのではなく、
人間社会として当たり前の機能である、人と人のつながりの力で
さまざまな問題に柔軟に対応できるようにしていく。

日々のあいさつにはじまり、商店の売り出し、見守り、生活支援、
防災・防犯などすべてをひとつのシステム（毛原放送局）に
まとめることで、毎日ひとつの場で交流しながら、
日常の課題も非常事態の課題もいっしょに対応する。

本プロジェクトの取り組みはこれからが本番です。
ぜひ、みなさんの参加をお待ちしています。



発行／ 2020 年 2 月 20 日

企画／毛原の棚田ワンダービレッジプロジェクト

制作／ NPO 法人いのちの里京都村